

愛媛県松山市方言における青年層の 名詞のアクセント

久保博雅

1 はじめに

愛媛県はアクセントの地域差が大きい県として盛んに研究が行われてきた。清水（2010）では従来のデータを基に類型化し愛媛県下のアクセントを以下のようにまとめている。なお、ここで用いる「式」という用語には2通りの意味があり、「式のある体系」「式のない体系」における「式」は対立する音調パターン（いわゆる「高起式」と「低起式」）を指し、その他の「讃岐式」「中央式」「東京式」などの「式」はアクセント体系のグループを指す。

A. 有アクセント

- I. 式のある体系 ①讃岐式…四国中央市、新居浜市の一部 ②中央式…新居浜市、西条市、今治市、東温市、松山市（一部の島嶼部を除く）など

II. 式のない体系

- (1) いわゆる東京式の体系 ①中輪式…松山市中島町（野忽那島を除く）、松山市安居島、宇和島市久島、宇和島市旧津島町など ②内輪式…大洲市青島、今治市大島、伯方島など
- (2) その他の体系 ①垂井式（B・C式）…上浮穴郡久万高原町 ②八幡浜式（八幡浜型）…八幡浜市、伊方町 ③八幡浜式（西予型）…西予市西部 ④日振島式…宇和島市日振島・嘉島など ⑤吉田町式…宇和島市旧吉田町など ⑥魚島式…越智郡上島町魚島

B. 無アクセント…内子町、大洲市、西予市、鬼北町、松野町、宇和島市東部

本稿では、松山市の青年層（20代、30代）のアクセントを扱う。松山市は上記の分類によると中央式が使用されており、式の対立のある方言とされている。しかしながら後述する秋山（2017）では標準語化が進行し式の対立は失われていると述べられている。本稿では筆者の内省と2名の話者の1～3拍名詞の調査データにもとづき、実際は式の対立が失われていないことを示すとともに、それぞれの話者のアクセントが伝統的な方言アクセントからどう変化しているかを個別に確認していく。

2 表記

本稿では以下の記号で音調を表記する。先行研究におけるピッチの高低を表す表記は様々だが、特に断らない限り以下のように表記を改めて記述する。

[…拍間の上昇、]…拍間の下降 ○…任意の自立語の拍 ▽…任意の付属語の拍

なお、当該地域では京阪地域に見られるような拍内下降は確認されない。また、アクセントの音韻論的な型を表す場合は高起を H、低起を L で表し、下降の位置を数字で示す。

3 先行研究

松山市のアクセントに関する先行研究として、ここでは山内（1932）、上野（1995）、秋山（2017）を取り上げる。

3.1 山内千万太郎（1932）

山内は6拍までの名詞、動詞、形容詞、助詞を内省により記述している。音調の型は「上」「中」「下」の組み合わせで表記され、例えば中中型は H0 型、上下型は H1 型、下上型甲類（助詞が高く付く型）は L0 型、同乙類（助詞が低く付く型）は L2 型に相当すると思われる。以下に山内の内省のうち3拍までの名詞を取り上げるが、各型の括弧内に山内の表記を併記する。

・ 1 拍名詞

H0 型（中型） [○ー 血、子、戸 1 型（上型） [○]ー 日、葉、名

L0 型（下型） ○[ー 火、絵、根

・ 2 拍名詞

H0 型（中中型） [○○、[○○▽ 柿、端、開き

H1 型（上下型） [○]○、[○]○▽ 垣、橋、飽き

L0 型（下上型甲） ○[○、○○[▽ 跡、息、海

L2 型（下上型乙） ○[○ ○[○]▽ 秋、雨、牡蠣

・ 3 拍名詞

H0 型（中中中型甲） [○○○、[○○○▽ 子供、桜、体

H1 型（上下下型） [○]○○、[○]○○▽ 姿、天気、男

H2 型（上上下下型） [○○]○、[○○]○▽ 片手、カタワ

H3 型（中中中型乙¹） [○○○、[○○○]▽ 明日

L0 型（下下上型） ○○[○、○○○[▽ 火鉢、雀、踵

L2 型 (中上下型) ○[○]○ ○[○]○▽ 柱、表、お玉

3.2 上野善道 (1995)

上野は昭和7～49年生まれの話者5名に調査を行い、名詞及び複合名詞、助詞のアクセントと音調型の報告をしている。本稿では、そのうち1～3拍名詞のアクセント体系と類別体系を以下に取り上げる。なお、上野は「高起式」「低起式」という用語は用いず「平進式」「上昇式」という用語を用いるが、本稿では一般に用いられる「高起式」「低起式」に統一する。表記は上野(1995)に準じており、「が高起、'が低起、'が下降を表す。

・ 1拍名詞

H0 型 「○(ー) 柄、蚊、子、血 H1 型 「○'(ー) 名、葉、日、藻

L0 型 」○(ー) 絵、木、手、火

・ 2拍名詞

H0 型 「○○ 飴、牛、風、口 H1 型 「○'○ 石、歌、紙、塩

L0 型 」○○ 跡、糸、傘、空 L2 型 」○○' 秋、雨、猿、鍋

・ 3拍名詞

H0 型 「○○○ 形、子供、桜、鼻血 H3 型 「○○○' 明日

H2 型 「○○'○ 詐欺師 H1 型 「○'○○ あずき、男、昨日

L0 型 」○○○ 兎、かもめ、鼠 L2 型 」○○'○ 後ろ、白髪、鯨

L3 型 」○○○' 一つ、一人、皆

類別体系は次のようであるという。

1拍名詞：1 (H0) / 2 (H1) / 3 (L0)

2拍名詞：1 (H0) / 2・3 (H1) / 4 (L0) / 5 (L2)

3拍名詞：1 (H0) / 2・4・5 (H1) / 6 (L0) / 7 (L2)

また上野は、下降式音調が確認されることと上昇式に対応する音調に特徴があることについて言及している。下降式音調は自然下降よりも大きな下降を伴う音調パターンであり、「高」「低」の枠の中で表すと「高高中」(3拍語)、「高高中中」(4拍語)のように現れるものである。下降式音調は上の体系のH0型に当たる語や、有核語のうち高起でピッチの高い拍がある程度続く語(H3型など)で確認されるという。以下に例を上げるが、!は拍間の中程度の下降を表す。

[クチ(口)=高高 [クチ!ガ=高高中 [サク!ラ(桜)=高高中 [サク!ラガ=高高中中
[ニバ!ンセ]ンジ(二番煎じ)=高高中中低低 [クリ!スマスケ]ーキ=高高中中中中低低
上昇式に対応する音調は「従来の報告のように、無核では文節末拍の直前で、下げ核が

あればその拍の直前で大きく上昇する音調」が確認されるが、加えて「2拍目から、またはどこからとも決めがたい形で上昇するもの」や、話者によっては「語頭から高く（あるいは、低くなく）始まるように聞こえるもの」もあるとする。先の体系では低起語のうち L0 型、または2拍目に核を持つ L2 型以外の有核語がそれに該当する。以下に例を上げる。

ナ[マタ]マゴ(生卵) cf. ナマ[タ]マゴ セー[リダ]ンス(整理筆筒) cf. セーリ[ダ]ンス
レ[コードガ]イシャ(レコード会社) cf. レコード[ガ]イシャ

3.3 秋山英治 (2017)

秋山も上野(1995)と同様に自身の調査から「下降式音調」が聴かれると述べている。ただしすべての発音で固定的に聴かれるわけではなく、人によって聴かれたり聴かれなかったりするという個人差や、同一人物内で下降式音調の他に高平調も聴かれるというゆれが存在することを指摘している。上昇式の特徴については上野(1995)で述べられている「2拍目から、もしくはどこからとも決め難い形で上昇するもの、話者によっては語頭から高く（あるいは低くなく）始まるように聞こえる」音調が聴かれると述べている。

また秋山は世代別調査の結果から各世代のアクセント体系、類別体系を示し、変化過程を分析している。調査対象の世代は、第1世代(1934年以前生)、第2世代(1935年～1944年生)、第3世代(1945年～1954年生)、第4世代(1955年～1964年生)、第5世代(1965年～1974年生)、第6世代(1975年～1984年生)、第7世代(1985年以降生)の7世代であり、各世代5～17名の話者に対し1～4拍名詞、動詞、形容詞の調査を行っている。この調査を基に、各品詞の類の合流や式の消失などの動向を分析しているが、本稿では1～3拍名詞の分析結果を紹介する。いずれも第1世代は伝統的な中央式と同じ類別体系(上野(1995)に同じ)である。

1拍名詞は第2世代で第3類に標準語形の1型が出現し第3世代で第2類と統合する。第5世代以降は第1類に1型が出現するが、これは標準語化ではなく1拍名詞を1つの型に統合しようとする自律的变化であり、また完全に1型にはなっていない。

2拍名詞は第3世代後半(1950年生)を境に式の曖昧化が起き、第6世代で式の対立が消失する。類別にみると、第3世代後半で一度第2～5類が1型に統合するが、第5世代で第2～4類に2型が出現、第7世代で標準語と同じ体系(1/2・3/4・5)になる。

3拍名詞は2拍名詞と同様に第3世代後半を境に式の対立が消失(曖昧化)し、H0型の第1類とL0型の6類が統合する。第4世代で統合していた第2～5類(H1型)のうち第2・4類に2型が出現、第5世代ではさらに3型・0型も出現し、ゆれるようになる。第7類(2型)には1型・0型が出現し、こちらもゆれる。第7世代では第2・4類の0

型が消失し2型と3型でゆれる(3型の割合が多い)。7類も2型、1型、0型でゆれるが、1型の割合が多くなる。3拍名詞は2拍名詞と比較して類全体ではなく個々の語において標準語化を起こす傾向があるとした。

以上の過程を経て、第7世代の類別体系は、中央式から以下のようになったとされる。

1拍名詞：1 (0~1) / 2・3 (1) 2拍名詞：1 (0) / 2・3 (2) / 4・5 (1)

3拍名詞：1・5・6 (0) / 2・4 (3~2) / 7 (1~2~0)

4 データ

本稿の記述は次の3人の話者によるものである。いずれも言語形成期は松山市内であるが、話者A・Bは市郊外、話者Cは市中心部である。

話者A 筆者。1991年生まれ。男性。2010年3月まで松山市内に居住。2010年4月以降は徳島県および広島県に居住。

話者B 1994年生まれ。男性。外住歴無し。

話者C 1987年生まれ。男性。2006年4月から2011年3月まで神奈川県に居住。

話者A = 筆者については内省により記述する。話者B・Cの調査では語単独の場合は、調査者が調査語の複数のアクセントパターンを発音し、その使用不使用を判断してもらう方法をとった。従来の読み上げ方式の調査では実際に使用しているアクセントが得られにくいと考えられるためである。また助詞付きの場合は、日常生活で使用するアクセントを得たいため、その語を使用する場面を想定し例文を作成してもらう形でデータを得た。

5 各話者のアクセント

本節では、話者ごとにアクセント型と音調、その所属語彙を記述する。所属語彙についてはいずれの話者も調査語の一部を示すが、話者Aに対し話者B・Cは調査の性質上多くの語数を調査することが出来なかったため語数が少なくなっている。

5.1 話者A

・1拍名詞

H0型 [○ー、[○ー▽ 柄、子、血、戸 (以上1類)、名、葉、藻 (以上2類)

H1型 [○ー、[○ー]▽ 日 (2類)、田、夜、輪 (以上3類)

L0型 ○ー、○ー[▽ 絵、木、酢、手、根、火、目、湯 (以上3類)

1拍名詞はH0型、H1型、L0型が確認され、式の対立を保持している。また長音化は義務的である。金田一語類で第3類に相当する語は標準語でH1型をとるため、一部その

影響があるように見えるが、多くの語は L0 型をとる。

・ 2 拍名詞

H0 型 [○○、[○○▽ 飴、牛、梅、枝、柿、風、蟹、雉、傷、口、腰、酒、皿、杉、
滝、竹、袖 (以上、1 類)、北 (2 類)、栗、姪 (以上、3 類)

H1 型 [○]○、[○]○▽ 痣、石、岩、歌、音、紙、川、牙、蟬、弦、夏、旗 (以上、
2 類)、足、網、池、色、裏、鬼、親、貝、瓶、茎、靴、熊、雲、坂、蚤 (以上、
3 類)、跡、板、稲、海、錐、屑、今朝、鞘、筋、隅、外、側 (以上、4 類)、藍、
秋、兄、鮎、井戸、桶、牡蠣 (以上、5 類)

L0 型 ○[○、○○[▽ 肩、桁、何 (以上、4 類)

L2 型 ○[○、○[○]▽ 毬、垣、殻、串、鞍、昼 (以上、2 類)、馬、膿、草、米、塩
(以上、3 類)、跡、銭、鑿 (以上、4 類)、朝、声、露、前 (以上、5 類)

H1orL2 型 [○]○、[○]○▽・○[○、○[○]▽ 旗、機、人、旅、梨、橋 (以上、2
類)、穴、犬、髪、花、皮、谷 (以上、3 類)、息、数、空、針、宿 (以上、
4 類)、青、赤、黒、猿 (以上、5 類)

H1orL0 型 [○]○、[○]○▽・○[○、○○[▽ 糸、傘、今日 (以上、4 類)

2 拍名詞は H0 型、H1 型、L0 型、L2 型が確認され、式の対立を保持している。金田一
の類別で第 4・5 類の語が標準語アクセントの型と方言アクセントの型でゆれが生じる。
このゆれはすべての調査語で一様に起こるわけではなく、H1 型と L2 型または L0 型 (4
類のみ) の両方が可能な語が複数存在し、また同じ類でも H1 型をとる語、L2 型をとる語
とばらつきが見られた。また、4 類は伝統的なアクセントならば L0 型だが、L2 型が多い
ことから L0 型から L2 型への変化も並行して起こっていることがうかがえる。これは現
代の関西方言若年層に見られる特徴と共通する。

・ 3 拍名詞

H0 型 [○○○、[○○○▽ 鯛、うがい、踊り、飾り、形、鯉、着物、鎖、車、煙、氷、
今年、子供、魚、桜、障子、印、相撲、畳、序で、机 (以上、1 類)、東 (2 類)、
林 (4 類)、油、簾 (5 類)、苺、盥、鉛、畑 (以上、7 類)

H1 型 [○]○○、[○]○○▽ 女 (2 類)、鮑、昨日 (以上、4 類)、朝日、鮑、哀れ、
命 (以上、5 類)、高さ、広さ (以上、6 類)、蚕、兜、便り (以上、7 類)

L0 型 ○○[○、○○○[▽ 田舎 (1 類) 夕べ (2 類)、暦、境、鯰、筵、菖蒲、兎、
鰻、大人、鴉、狐、雀、団子 (以上、6 類) 鯨 (7 類)

L2 型 ○[○]○、○[○]○▽ 二重、二人 (以上、2 類)、団扇、硯、鋏 (以上、4 類)、
五つ、従兄弟、心 (以上、5 類)、虱、長さ (以上、6 類)、後ろ、葉、卵 (以上、

7類)

L3型 ○○[○、○○[○]▽ 小豆、二つ、三つ (以上、2類)、明日、頭、表、敵、宝、助け (4類)、襷 (5類)、すすき (6類)

H0orL2型 [○○○、[○○○▽・○[○]○、○[○]○▽ 辛子 (7類)

H1orL2型 [○]○○、[○]○○▽・○[○]○、○[○]○▽ 匂い (4類)、緑 (7類)

L0orL2型 ○○[○、○○○[▽・○[○]○、○[○]○▽ 毛抜き (2類)、白髪 (4類)

L0orL3型 ○○[○、○○○[▽・○○[○、○○[○]▽ 鏡、刀、頼み (以上、4類)

3拍名詞は H0型、H1型、L0型、L2型、L3型が確認され、式の対立を保持している。

7類語については大きく分けて H0型、H1型、L2型に分けられるのが特徴的である。多くはないが、H0型とL2型、H1型とL2型など、2つの型でゆるる語も見受けられる。

上でH(高起)とした型の音調は高く始まり平らに進むもので、下降式と表現できるようなものではない。L(低起)は無核では文節末拍の直前、有核ではその拍の直前で上昇する遅上りの音調をとり、先行研究で述べられているような上昇の特徴はない。

5.2 話者 B

話者 B は学生時代に放送部に所属していたためか、標準語アクセントと方言アクセントの使い分けを明確に行えた。以下、話者 B が方言アクセントと認識するものを記述する。

・1拍名詞

H0型 [○ー、[○ー▽ 蚊、血、戸、帆 (以上、1類)、名、藻、矢 (以上、2類)

H1型 [○]ー、[○]ー▽ 葉、日 (以上、2類)

L0型 ○ー、○ー[▽ 絵、木、酢、手、火、目、夜 (以上、3類)

1拍名詞は H0型、H1型、L0型が確認され、式の対立を保持している。また長音化は義務的である。話者 A のように第3類における標準語の干渉はないが、2類に属する語については H1型をとる語と H0型をとる語があり、H0型の方が多い点の特徴的である。

・2拍名詞

H0型 [○○、[○○▽ 鉛、烏賊、枝、柿、壁、口、竹、西 (以上、1類)、姪 (3類)

H1型 [○]○、[○]○▽ 石、歌、音、紙、川、牙、夏 (以上、2類)、足、犬、芋、色、馬、膿、親、髪、靴、熊 (以上、3類)、兄、牡蠣、鶴、蛭 (以上、5類)

L0型 ○[○、○○[▽ 穴、皮、玉 (以上、3類)、息、板、糸、海、傘、数、肩、角、汁、杖、苗、肌、船、麦 (以上、4類)、井戸、桶、足袋、蛇 (以上、5類)

L2型 ○[○、○[○]▽ 跡、今日 (以上、4類)、青、赤、秋、汗、雨、蜘蛛、黒、声、猿、白、鍋、春 (以上、5類)

H1orL2 型 [○]○、[○]○▽・○[○]、○[○]▽ 痣（2類）、草（3類）

L0orL2 型 ○[○]、○○[▽・○[○]、○[○]▽ 空（4類）、窓（5類）

2拍名詞はH0型、H1型、L0型、L2型が確認され、式の対立を保持している。第4類でL2型の語は話者Aより少ない。一方少数だが、第5類に相当する語が一部H1型をとっており、標準語アクセントの影響がうかがえることは無視できない。

・3拍名詞

H0 型 [○○○]、[○○○]▽ 鯛、漆、形、着物、煙、今年（以上、1類）、東（2類）、暦、俵（以上、4類）

H1 型 [○]○○、[○]○○▽ 女、娘（以上、2類）、男、表、言葉、匂い、光、袋（以上、4類）、朝日、鮑、哀れ、命、胡瓜、枕、紅葉（以上、5類）、病（7類）

L0 型 ○○[○]、○○○[▽ 兎、大人、鷗、狐、雀、鼠、左（以上、6類）、畑（7類）

L2 型 ○[○]○、○[○]○▽ 小豆、毛抜き、二重（以上、2類）、頭、団扇、鏡、敵、刀、白髪、硯、頼み（以上、4類）、油、従兄弟、涙、柱、箒（以上、5類）、苺、後ろ、兜、辛子、鯨、薬、盥、椿、緑（以上、7類）

L3 型 ○○[○]、○○[○]▽ 二つ、二人、夕べ（以上、2類）、一人（7類）

H1orL2 型 [○]○○、[○]○○▽・○[○]○、○[○]○▽ 縫い目（4類）、心、姿、山葵（以上、5類）

3拍名詞はH0型、H1型、L0型、L2型、L3型が確認され、式の対立を保持している。伝統的なアクセントでL2型をとるのは第7類に相当する語だが、第4・5類でもL2型をとる語があるのが興味深い。それに伴い少数だがH1型とL2型でゆれる語がある。第7類は話者Aと異なり多くがL2型をとる。話者Aと同様、「下降式」と呼べる音調はなく、低起式の音調はほとんどが無核では文節末拍の直前、有核ではその拍の直前で上昇する遅上がりの音調をとる。

5.3 話者C

話者Cは式の対立がなく、下降の有無と位置のみで記述できる体系を持つ。

・1拍名詞

0型 ○(-)、○(-)▽ 柄、蚊、子、血、戸、帆（以上、1類）、鶴、名、葉、日、藻（以上、2類）、矢、絵、木、酢、田、手、根、火、目、湯（以上、3類）

1拍名詞は確認した限り全て0型である。長音化は話者の発音によると義務的ではなく、語によって現れたり現れなかったりする。

・ 2拍名詞

0型 ○[○、○[○▽ 飴、柿、口、竹（以上、1類）

1型 [○]○、[○]○▽ 傘、筋、肌、船（以上、4類）、黒（5類）

1・2型併用 [○]○、○[○]▽ 糸、海、肩、管、汁（以上4類）、青、赤（以上5類）

2拍名詞の特徴は、第4・5類において語単独で発音した場合と助詞付き（文中）で発話した場合にはアクセントが変化する点である。語単独では1型、助詞付き（文中）では2型で発音されるものがあり、この2型は中央式アクセントの第4・5類で見られるL2型に相当する（第4類は元はL0型だが、話者AのようにL2型に変化しているものと考えられる）。話者Cは、中央式アクセントを部分的に保持しながら、標準語の干渉も強く受けており、発話内でしか中央式アクセントを得ることが出来ないものと考えられる。

・ 3拍名詞

0型 ○[○○、○[○○▽ 田舎、鯛、形、寝言（以上、1類）、女、毛抜き（以上、2類）、襷、兎、鴉、雀、背中、鼠（以上、6類）、盥、畑（以上、7類）

1型 [○]○○ [○]○○▽ 男（4類）、従兄弟、柘榴、山葵（以上、5類）

2型 ○[○]○、○[○]○▽ 二重（2類）、鏡、白髪（以上、4類）、油（5類）、苺、緑（以上、7類）

3型 ○[○○、○[○○]▽ 娘（2類）、縫い目（4類）、襷（5類）

2型・0型併用 ○[○]○、○[○○▽ 小豆（2類）、頭（4類）、後ろ、葉（以上、7類）

2型・3型併用 ○[○]○、○[○○]▽ 心、柱（以上、5類）

3拍名詞でも、語単独では2型、助詞付き（文中）では0型あるいは3型と、アクセントが変化する現象が起こる。ただし2拍名詞と異なり、助詞付きの型が伝統的な方言アクセントというわけではない。

話者Cについては遅上がりの音調は見られず、例えば3拍名詞で0型や3型のものは2拍目から上昇する音調で確認された。これは標準語の句音調と一致する音調と言える。

6 まとめと展望

本稿では、従来の読み上げ方式の調査ではなく、調査者が各語について複数のアクセントパターンを発音し、1語1話者に内省させ、助詞付きについてはその語を使用する例文を作成してもらって調査方法をとることで、話者が日常会話で使用するアクセントと想定されるものを得ることが出来た。その中で、式の消失は必ずしも起こっていないことや、

アクセントの標準語化は個々人程度が異なり必ずしも一様ではないことが明らかになった。

読み上げ方式では多くの語のデータを得られることが利点だが、今回の調査結果は、この方法では話者が日常的に使うアクセントを必ずしも得られないことをうかがわせるものであった。秋山（2017）は読み上げ方式をとっており、そのために実際よりも過度に標準語化した様子を呈する記述になったのではないかと疑われる。これまでも読み上げるアクセントと実際の発話のアクセントが異なることはしばしば指摘されてきた。亀田（1993）では静岡県清水市方言の名詞アクセントについて、読み上げ方式と談話で実現する音調を比較しており、談話の中では読み上げ方式では得られなかった「型を破壊する音調の存在」を確認し、文音調（文末の疑問などを表す狭義のイントネーションと区別）と表現性の対応について考察している。これは本稿のように標準語アクセント対方言アクセントを意識したものではないが、読み上げ方式での調査で実際の発話で用いられる音調を得るには限界があることを示している一例といえよう。本稿では読み上げ方式の調査との比較は実施していないが、同一話者に読み上げ調査を実施した場合、秋山（2017）の第7世代に近いデータが得られてもおかしくない。

また5章でアクセント型と類別語彙の対応についても触れた。先行研究のうち上野（1995）と秋山（2017）の第1世代の調査データは、標準語化の影響がない分、アクセント型と類別語彙の対応がかなり明確であるが、その一方で、例えば3拍名詞第2類にはH1型をとる語とL2型をとる語があるなど、現在の青年層と共通する特徴もある。これらは標準語化により第3類に属する一部の語のアクセントが変化したのではなく、元々の松山市のアクセントということになり、アクセント型と類別語彙が対応しないことが必ずしも標準語化によるものとは限らないため注意が必要である。

最後に、話者A・Bが式の対立を保持し、話者Cが式の対立を保持していない点について述べたい。この結果は個人差と言ってもできるが、前述のとおり話者A・Bの言語形成地は市郊外、話者Cは市中心部である。したがって地域差の可能性も否定できない。少なくとも現在のデータから、松山市のアクセントは均質ではないと言えよう。これについては今後の課題とし、より多くの話者を調査して検討したい。

注

- 1 山内（1932）では「あした」の甲乙の分類をしていないため補って表記している。

参考文献

秋山英治（2017）『愛媛県東中予方言のアクセントと共通語のアクセント—日本語史再建

のために一』おうふう

上野善道（1995）「松山市方言のアクセント調査報告」『愛文』30

亀田裕美（1993）「読み上げ式と対比した談話の音調実現相と情意表現：清水市方言の名詞について」『東北大学文学部日本語学科論集』3

金田一春彦（1974）『国語アクセントの史的研究 原理と方法』塙書房

清水誠治（2010）「愛媛にみるアクセント分布の多様性」『日本語研究の12章』明治書院

山内千万太郎（1932）「松山方言のアクセント研究」『方言』2-3

（広島大学大学院教育学研究科博士課程後期）